

## 時評

公教育の今－神戸小学生殺人事件報道から浮き上がってきたこと－

神戸の小学生殺人事件がマスコミで取り上げられています。事件には冤罪の可能性があるので、事件そのものについてはコメントを控えますが、その事件を巡って、公教育の現場の状況が色々伝えられ、また教育のあり方で議論がかわされています。そのことについて、若干コメントして置きたいと想います。

もうずっと前から「学校が死にかかっている」というような発言が出ています。今回の報道の中で、今の学校の様子が伝えられるのをみていると、むしろ、そんな学校によく行けるなということを感じました。不登校の子どもは、「病んでいる」のではなく、むしろ、「まっとうな」感性をもった子どもたちで、通い続ける子どもたちの方が学校と一緒に病んでいるのではないかとさえ想えます。

さて、以前にも校内暴力やいじめなどの問題が浮上し、大きな問題になった時に、公教育は管理の強化というように進んでいきました。その弊害が、教師さえも単に管理するという立場でなく、管理される者として、呻吟していくということに陥り、それが生徒にさらにしわ寄せされていくという構造が現れてきています。今回の事件とその報道の中で、その「対策」としてまた管理教育強化の方向性を行政側は出そうとしているのですが、このことは逆に自分で自分の首をしめるということになるのではと想えます。

そして、更に驚いたことに、革新政党と言われる政党の機関紙で、管理の失敗の責任を追求するような記事を書いているのです。教育ということを単に教育の場だけでとらえ返し、どうしようかとすれば、管理の問題しかとらえられません。このことははその端的な現れです。

今回の事件の後、パフォーマンス好きの首相は「心の教育」という言葉を口にしたりしています。そもそもこういった状況を生み出しているのが体制そのものとすれば、その保守の正統派に位置してきた当人が自分たちの責任を棚上げにして、このようなセリフがはける感性が信じられません。その事件のちょっと前に、脳死・臓器移植法案が審議がほとんどなされないまま通ったことをも同じようなことだと想っています。一体どうとらえればよいのでしょうか？ 脳死・臓器移植法案というのは、ひとの「死」に、そのことを通じてひとの生に、価値付をすることを意味しています。今回の事件で、死体から首を切り取ったということがセンセショナルに取り上げられていますが、まだ心臓が動いている身体から臓器を取り出すということが、余程センセショナルなことです。それが科学という名で粉飾されているだけです。しかも、その人の生と死に関することが十分に審議をされないで決まっていく、それは、まさにひとの生の軽視以外の何物でもないのです。国会がそのような姿勢を取りながら、何が「心の教育」でしょう!? むしろ、ひとの命を軽視することを身をもって示しているのです。

そもそも、教育で「友達を大切にしよう！」などと言いながら、受験一辺倒の教育の中で、他者を蹴落として自分がい上がって行くことを、その教育の核としている、まさに

本音と建前の分離をもたらしていて、そんな嘘っぱちな教育で、何で子どもがそんな教育に矛盾を感じないで矛盾を生じないでいられるのでしょうか!?

さて、今回の教育のとらえ返しの中で、注目しているのは「教育が目的を失っている」という指摘です。私は、教育そのものは、労働力の再生産過程という意味を貫いていると思っています。それはこの社会の特性ですが、そのようなことを表面きって出せないが故に、目的を見失っているようにとらえられるのだと想えます。むしろ、それは教育というよりは、教育が労働力の再生産過程として、そもそもなんのために労働するのか、ということを見失っているのだと想えます。「学校」という映画の中で（その映画には色々批判点がありますが）、「学校とは何をするとところ？」と「教師」が問うて、生徒が「学校って、幸せって何か学ぶところ」と応える場面がありました（「教師」が生徒に教えられたという場面でもあったのですが・・・）。教育も労働も何のために、ということを見失っているのです。

さて、このようなことを書きながら色々考えていて結び付いたのは、「資本の論理」です。「資本は、何のために商品生産するのかということを経験して、自らが生き延びるために、飽くなき利潤を追い求め、悪無限の競争を強いられる、競争するために競争するという転倒に陥る」ということですが、資本(貨幣)が物神としてたちあられるこの資本主義社会の構造そのものに、目的を見失った教育の、そしてこの社会の矛盾の根源があるのではないのでしょうか!?